成人向け
俺の彼女がサークルのイケメン先輩に寝取られる
なんて事あるわけがない
ねとらる！

ここは都会の有名な大学

俺はたける。
猛勉強の末、この大学に入ることができた。
四月からは一人暮らしだ。
本当に受かるなんて、夢のようだった。
やればできるもんだなっと思う。
なぜ、必死に勉強してこの大学に入ろうと思ったかというと……

テニスコート

「あっ、たける君」

「さとみ、もう来てたんだ」

彼女は幼馴染で、高校から付き合い始めたのだけれど、
俺より成績がよくて、志望校に格段の差があった。
別々のキャンパスライフはいやだったので、必死に勉強してなんとか
一緒にこの大学にこれたのだ。

本当はこんなちゃらいテニスサークルにも
入りたくはなかったけど、彼女が入るっていうから……

「もう慣れた？」

「はい」

あいつはサークルの先輩で、新入生の女の子は皆かっこいいと言っている。
あんな顔だけのやつどこがいいんだか。
さとみも話しかけられてうれしそうにしやがって、くそっ。

新歓コンパ

今日は旅館を借り切って泊まりで新入生歓迎コンパが行われた。

「さとみ、一緒に飲もうよ」

「新歓なんだしもっといろんな人と触れ合ったほうがいいよ」

そういって彼女は行ってしまった。

「さあ、どうぞ」

「ありがとうございます」

またあの先輩がさとみに話しかけてる。

（あ、あいつめ……）

「ほら飲んでるか?」

「は、はあ」

他の先輩につかまってしまって
飲まされてしまう。

そのうち酔いつぶれて寝てしまった。

翌日

「気付いたら寝てたよ」

「私も割と早く寝ちゃった」

さとみに何もなさそうでよかった。

ストーキング

ある日

「あれは」

さとみと先輩が二人で歩いてる。
いったい何をしてるんだ……

どうにも気になるのでつけてみることにした。

二人を追って部室などが入ってる建物に来た。

（どこに行く気だ）

二人は印刷室に入っていった。

（どうしよう……）

印刷室は内鍵がかかるので、
連れ込み部屋として使われているらしい
という話を聞いたことがある。

どうすることも出来ず、
扉の前でうろうろしてたら、
通りすぎる人たちに変な目で見られた……

しかたないので、少し離れた柱の影に隠れて
出てくるのを待つことにした。

一時間ほどして、二人が出てきた。

「また、たのむよ」

「はい、私でよければ」

「じゃあ俺、他にも用事あるからこれで」

先輩は一人行ってしまった。

俺は一人になったさとみに話しかける。

「さとみ、な、なにしてたの」

「な、何でここに」

「いや、さっき見かけたから」

「つけてたの」

「なにって、先輩がパンフ印刷するの手伝ってただけよ。
それがいけないことなの？
私は何かするたびにあなたの許可を取らなければいけないの？
こそこそ私のこと監視して気持ち悪い。
あと、呼び捨てにしないで、私はちゃんと君付けで
読んでるでしょ、
私はあなたのものじゃないのよ、付き合ってるからといって
勘違いしないで」

さとみは怒って行ってしまい、
僕は一人取り残された。

しばらく口もきいてくれなかった。

ファーストキス

サークルによったけど、
さとみちゃんがいなかったので
一人で帰宅。
（あれは）
さとみちゃんが一人買い物袋をもって、
歩いている。
「さとみちゃん、もつよ」
「あ、たける君」

荷物を運んであげる。

（食材みたいだけど、結構量がある。）

「や、やすかったからまとめてかったの」

しっかりしてるな。

彼女のマンションのすぐそばまで来た。
まだ、部屋に入れてもらったことはない。

「ここでいいから」

「あ、あの部屋に……」

勇気を出して言おうとしたとき……

「あ、ありがとう」

そう言って彼女は行ってしまった。

（やった
ファーストキスだ）

彼女の柔らかい唇の感触を僕は
しばらくの間、忘れることができなかった。

合宿

夏休み

サークルで合宿に来た。

「暑いな」

一応テニスコートもあって、
昼間はそれなりに練習したりもする。

夜

「あの映画めっちゃおもしろいから」

「まじで」

最初はチャラくていやだったが、
気がつけば何人かと仲良くなっていた。

いろんな人と交流してみるもんだな、
さとみちゃんの行ってたとおりだ。

「んっ」

「どうした」

「うめき声みたいなの聞こえない」

耳を澄ますがなにも聞こえない。

「何も聞こえないじゃん」

「びびらせんなよ」

「あれ、おかしいな」

「それよりウノやろうぜ」

こうして夜更けまでみんなで遊んだ。

合宿打ち上げ

合宿最終日打ち上げ

「いっしょに飲も」

「う、うん」

珍しくさとみちゃんが誘ってきた。

ごくごく

さとみちゃんはすごいピッチでお酒を飲んでる。

「だ、大丈夫？」

どうしたんだろう……

さとみちゃんが酔っ払ってもたれかかってくる。
酔っ払っちゃったみたい
俺はさとみちゃんを休ませるために、
適当な部屋に彼女を連れ出す。

空いている部屋を見つけてそこに入る。

「ふうっ」

ど、どうしよう二人きりだ……

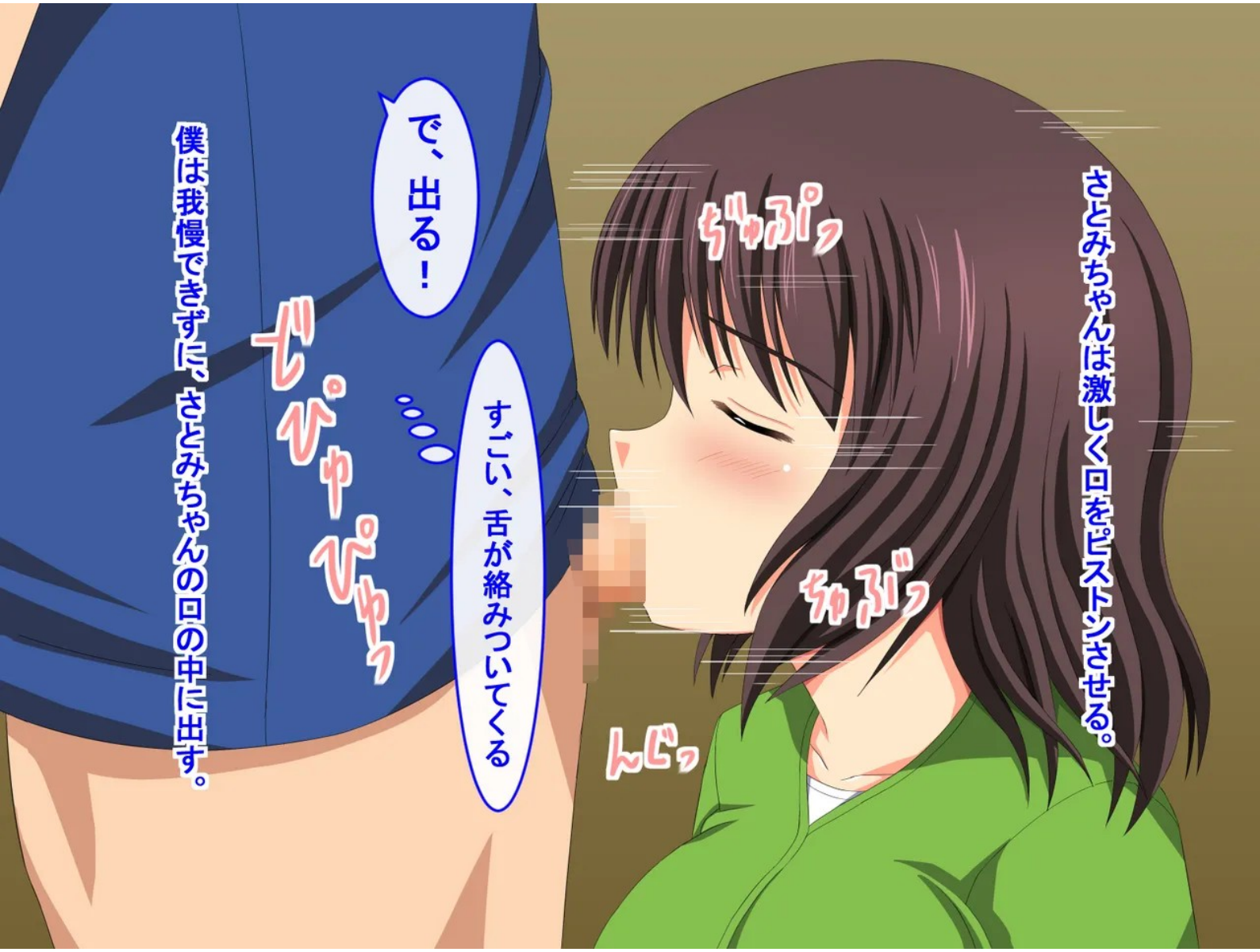
「横になる？」

「ねえ、口でしてあげようか」

「えっ」

さとみちゃん何を言ってるんだ……

さとみちゃんはズボンのチャックをおろすと俺の局部を露出させくわえる。
なっ……なんで
ちゅぶっ
ちゅぶっ
ちゅぶっ
さ、さとみちゃんが僕のをくわえている。ど、どうして急に……


さとみちゃんは激しく口をピストンさせる。
ちゅぷっ
ちゅぷっ
んぐっ
すごい、舌が絡みついてくる
で、出る！
びゅびゅっ
僕は我慢できずに、さとみちゃんの口の中に出す。

さとみちゃんは僕の精液をティッシュに吐き出す。

「ご、ごめん」

「気持ちよかった？」

「う、うん」

さとみちゃんは満足そうだった。

初めての……

彼女と一緒に帰宅中。

「家、来る？」

「え、いいの」

ついに彼女の部屋にお呼ばれした

彼女の部屋に初めてはいる。

（なんか緊張する）

しばらく雑談してたら……

「いいことしてあげようか」

いいことって？

さとみちゃんは風呂場に僕を連れて行き服を脱がせると、
マットに寝かせる。
このマットって……
ねえ、気持ちいい？
う、うん
彼女の裸を見るのも初めてなら触れるのも初めてだった。
さらに、最初からこんな……
ペロッ
ペロッ
ぬちゅっ
ぬちゅっ

さとみちゃん、どうして？
いや？
いやじゃないよ
たける君にに喜んでもらおうと思って
一生懸命考えたの
スルッ
ペロッ
ペロッ
ぬちゅっ

俺はもう射精寸前だった。
すぐに、だしちゃだめだよ、我慢してね
う、うん

な、なんでコンドームなんかもっているんだろう……
ていうかコンドーム付けるって……
そういってさとみちゃんはコンドームをどこからか
取り出すと僕につけてくれた。
つけてあげるね
ペロッ
ペロ～ン
ぬちゃ

さとみちゃんが僕に馬乗りになる。
さとみちゃんの中に入ってる。
んんっ
ああっ
ズプッ

さとみちゃんが僕の上で腰を振る。
ねえ、気持ちいい？
うん
本当？
本当だよ
ぱんっ
ぱんっ
ずぶっ
ずぶっ
ぱんっ

さとみちゃんの動きが激しさを増す。
さとみちゃん、はじめてじゃないのかな……
ねえ、たける君も腰動かして
気持ちいい？
う、うん私も気持ちいいよ
ぱんっ
ぱんっ
ずぶっ
ぱんっ
ずぶっ

ぼくはさとみちゃんに言われるがままに動く。
だ、だめだ
我慢できずに射精してしまう。
もうでちゃったの？
ドププッ
ご、ごめん
ううん、いいの

卒業

卒業シーズン

追い出しコンパが行われる。

さとみちゃんは先輩と話してる。

まあ、先輩はもう卒業で最後だし……

気付いたらふたりの姿が見えなくなっていた。

「あれ、どこに」

「おいたける、こっちこいよ」

僕は他の先輩に捕まり、
しこたま飲まされた。

一時間ほどしてからさとみちゃんがこっちに来た。

「せ、先輩は？」

「別に何も……もしかして、焼いてる？」

「そ、そんなわけ」

大丈夫、僕はさとみちゃんを信頼してるから。

「すごい酔ってるみたい」

「うん、けっこう飲んだから」

「あっちで休みましょう」

俺はさとみちゃんに空いてる部屋へとつれられていった。

それから……

しばらくして、さとみが妊娠が発覚した。
あまり覚えていないけど、どうも酔っ払って避妊せずにしてしまったらしい。
俺は自分の浅はかな行動をさとみに謝罪した。
さとみはその子を生むといった。
僕は大学をやめ働き始めた。
僕は幸せだ。

新入生歓迎コンパ

「ほどほどにね」

香は冷たい声で聡にそういった。

「わかってるよ」

香と聡は許婚だ。
ともに資産家の親を持ち、エリートコースを歩んできた。
その代わり婚姻相手を選ぶ自由はない。
それでも、香も聡もお互いに愛し合っていたので、
とくに文句があるわけではない。
ただ、香は結婚するまでは体を許すつもりがなかったので、その点のみ聡には不満であった。
その代わり香は聡が他の女の子に手を出すことを黙認していた。

（とりあえず相手を探すか）

聡は手ごろな相手を物色する。

「せ、先輩
一緒に飲みませんか」

イケメンで優しい先輩。
それがさとみの聡に対する印象だった。

「じゃあ一緒に飲もうか、さとみさん」

「は、はい」

さとみは進められるままに酒を飲む。

聡の甘い声と気遣いと場の雰囲気に
都会にあこがれて地方からでてきたさとみは
のぼせ上がってしまう。

（たける君ももっと、
こんな感じだったらいいのに）

さとみはたけるにうんざりしていた。
付き合ってはいるし嫌いではないが、
しゃべり方が横柄なところとか、同じ大学にわざわざ入ってきたり、
さらに同じサークルに入ってきたりして正直わずらわしい。

「わ、わらし」

さとみは飲みなれない酒にすっかり酔ってしまう。

さとみは聡にもたれかかる。
すごい酔っちゃったみたいで……
(ちょろいな)
聡はあまりのあっけなさに物足りなさも感じたが、
ここまでしといて、ほったらかしにするわけにもいかず
この女で妥協することにした。
向こうで休もうか
さとみはうなずく。

「ここで休もう」

「ありがとうございます」

聡はさとみを空き部屋に誘い込む。
ここは休憩部屋という体のやり部屋である。

さとみは危機感もあったが、
酔いが好奇心を後押しして、
流されるままになっていた。

なんだか、からだがほてって
そういってさとみは上着を脱ぐ。
こんなイケメンが自分に興味を持っているという勘違いと、
彼氏がいるのにこんな事をしているという背徳感が
さとみを大胆にさせる。

聡は試すようにおっぱいをさわる。
さとみは拒絶しない。
まだ、あついかな
はい……
脱がしてあげるよ
その動作はとてもソフトでやさしかった。

さとみの乳房がむきだしになる。
綺麗だよ
そんなこと……
さとみは、謙遜しつつも聡のおせじを真に受けて有頂天になる。

聡はさとみのおっぱいをまさぐる。

んんっ

ムニッ

むにゅ

さとみは甘い刺激に酔う。

いいかな
さとみは返事をしないことで
受諾の意思を示す。
同じ建物にたけるがいることが
一瞬頭をよぎったが、
酔いとイケメン、イケボイスにかき消される。

聡はその場にさとみを寝かせる。
さとみは抵抗しない。
いくよ、さとみさん
呼び捨てでいいです
いくよさとみ
は、はい

聡の性器がはいってくる。
あああああっ
私の初めて……
ズブブッ
さとみははじめてはたけるとするのだろうとぼんやり考えていた。
べつにいやではないのだけれど、凡庸な人生にうんざりもしていた。
それが、イケメンと初めてを迎えることができて、まるで夢心地であった。

さとるはやさしく腰を動かす。
ぐぷっ
ずぷっ
ぐぷっ
んあああ
力を抜いて
は、はい

次第に聡の動きが激しくなってゆく。
ぐぷっ
んあ
じゅぶっ
ああああっ
ぐぷぷ
セックスってこんなに気持ちよかったんだ
ぐぷっ
ずぼっ

じゅぷっ
ぐぷっ
気持ちいい？
んあああぁ
じゅぷっ
き、気持ちいいです
ずぶっ
ずぶっ

聡はさとみをさらに激しくうちつける。
ずぽっ
ああああ
ずぶっ
なにかくるよ
ぐぷっ
ちゅぶっ
はあああああ
んあああああああ
ずぶっ
さとみはイってしまう。

先にイってしまうなんていけない子だ
ああ、イったばかりなのにまた……
おかしくなっちゃうよ
んあああ
んんん
ちゅぶっ
ずぶっ
ヌプッ
ずりぶっ
ぶぷっ

中に出すよ
はい
さとみに冷静な判断力はなかった。
ドププッ
さとみの中に精液が注ぎこまれる。
精液がはいってくるよ

彼氏のそばで

とある日の午後

聡は性欲処理の相手を探していた。

「ちょっといいかな」

とりあえず、そこにいたさとみに話しかける。

「は、はい」

「これ、印刷するの手伝ってもらえるかな」

さとみは聡についていく。

むろん、意図はわかっている。

聡は印刷室にさとみを連れ込む。

部室棟にある印刷室は内鍵がかかるので、
やり部屋としてよく使っていた。

「じゃあ、脱いで」

「は、はい」

さとみは素直に聡の指示に従う。

さとみはあれから何度か聡に抱かれていた。
はじめは酔った上での過ちだったが、
それ以降はそうではない。

さとみは、たけるに対する罪悪感を抱きつつも、
イケメンの聡に必要とされていることが、
自分の価値を高めているように錯覚し、
聡を拒絶することはできなかった。

聡は容赦なくさとみを打ち付ける。
先輩のおちんちんすごいのおおお
さとみは聡にとっては面白みにかけたが、ただ一点気に入ってる部分がある。
ははは、彼氏が聞いたらどう思うかな？
さとみが彼氏もちであることが、聡には面白く思えた。
じゅぷっ
ズブ
ズブッ
ズブッ

お、誰か人がいるみたいだぞ
やん、こんなとこ見られたら
ははは、大丈夫だよ、鍵かかってるから
ぢゅぷっ
ぢゅぷっ
ズプッ
ズボッ
ぬぷっ

もし彼氏だったら、どうする
実際、それはたけるだった。
いや、嫌われちゃう
たけるに見られながら聡に犯される状況を想像して
さとみは興奮する。
ぢゅぷっ
ぢゅぷっ
ズブ
ぬぷっ
ずぷっ

彼氏のこと好き？
嫌いじゃないです
さとみが彼氏を思い続けているのが、聡の征服欲を刺激する。
またいらなくなったら、押し付ければいいからめんどくささもない。
ずぶ
ずぶっ
ずぶっ
ぬぶっ
じゅぶっ

その答えは満足するものだったが
実際には別れられてはこまる、
聡はさとみと付き合う気などないし
最後に押し付ける相手が必要だ。

そろそろ出すよ
はい中に出してください
ヌプッ
じゅぷっ
じゅぷっ
ちゅぷっ
ずぶぶ

聡はさとみの中に盛大に射精する。
あああああぁぁぁ
ドプププッ

「また、たのむよ」

「はい、私でよければ」

「じゃあ俺、他にも用事あるからこれで」

聡と別れたさとみにたけるが声をかける。

「さとみ、
な、なにしてたの」

「な、何でここに」

突然あらわれたたけるにさとみは狼狽する。

「いや、さっき見かけたから」

「つけてたの」

「なにって、先輩がパンフ印刷するの手伝ってただけよ
それがいけないことなの？
私は何かするたびにあなたの許可を取らなければいけないの？
こそこそ私のこと監視して気持ち悪い。
あと、呼び捨てにしないで、私はちゃんと君付けで
読んでるでしょ、
私はあなたのものじゃないのよ、付き合ってるからといって
勘違いしないで」

さとみはごまかすために逆切れする。
そして、切れてるうちに実際たけるが悪いような気がしてきて
罪悪感もなくなってくる。

「……」

（まあ、しばらくしたら、
許してあげよう）

さとみはたけるを置いてその場を立ち去る。

フェラした口で……

さとみの部屋
聡はさとみの部屋にきていた。
「ああ、いいよその調子だ」
んぐっ
ずぷっ
ぢゅぷっ
ちゅぷっ
んぐっ
ぢゅるっ
ちゅぷっ

さとみは聡の望むがままに奉仕するようになっていた。
聡には彼女がいることも知っていたし、他の女の子にも手を出していることも知っていた。
やっぱり、さとみといっしょにいると落ち着くよ
んぐっ
ちゅぶ
じゅぷっ
ちゅぷっ
それでも、そんな風にいわれると、自分が選ばれた気分になって、優越感を感じてしまう。
ずゅぷっ
また体に刻み込まれた性的快感は忘れることができなかった。

一生懸命だけど
正直、あんまりうまくないよな
聡が今日さとみの家に来たのは他の娘の
代わりだった。
聡は心の中で昨日寝た女の子のことを思い出した。
昨日の娘は上手かったな
ずぷっ
ずぷぷっ
ぢゅぷ
ぐぢゅっ
じゅぷ
んぢっ
ずぷ
んぢっ

聡は射精する。
やっと出た
ドププッ
んぐっ
ぢゅるるるっ
ずるるっ
さとみは一滴も残すまいと尿道に残った精液を吸出てのみこみ、舌でお掃除する。
わたしの体で気持ちよくなってもらえてるうれしい

「腹減ったから何か買ってきて」

続きをせがまれてもたまらないので、
聡はそう言った。

「は、はい」

（えっとこれでいいかな）

さとみは聡の好きそうな食材を大量に買い込む。

「さとみちゃん、もつよ」

「たける君」

買い物帰りにさとみは偶然たけると出会ってしまう。

荷物を運ぶのを手伝う

（……）

たけるは大量の食材を見て訝しがる

「や、やすかったからまとめてかったの」

狼狽しながらさとみはそう答える。

マンションのすぐそばまで来た。

「ここでいいから」

「あ、あの部屋に……」

（なんとかごまかさないと……）

これでごまかせるかな
さとみは先ほどまで聡のちんぽを
くわえ込んでいた唇でたけるにキスをした。

「！」

たけるはびっくりしている。

「あ、ありがとう」

さとみは逃げるようにその場を立ち去った。

隣の部屋で……

夏休み

サークルの合宿

「あ、今日夜、俺の部屋に来て」

「は、はい」

夜

聡の部屋には複数人の女子が呼ばれ、あられもない格好をさらしていた。
んあああああ
ずぶ
ぢゅぶ
ぢゅぶっ
さとみは自分だけが呼ばれたわけではないことに不満ではあった。
どの娘としようかな？
わ、私にもお願いします
しかし、他の娘に負けるわけにもいかないので精一杯媚を売る。

んんあああああ
すごい気持ちよさそう
ああ、もっと……
ずぶっ
ずぶっ

あああああん
んんあああ
じゅぷっ
ずぷっ
さとみは他の娘が見てる前ではしたなく声を上げる。
声抑えてね、壁薄いから隣の部屋に聞こえちゃうよ
は、はい
くすくすと笑い声が起きる
うう、はずかしいよ……

じゃあ、ちょっと競争してもらうよ
えっ
勝った順に愛してあげる

この部屋には女の子たちだけでなく
聡の仲間も呼ばれていた。
イかせたら勝ちだから
ぢゅぶっ
ぢゅぶっ
ぢゅぶっ
ぢゅぶっ
ぢゅぶっ
ずぶ

気持ちいい～
うおおお
聡ありがとう
聡はこの手のおふざけをよくしていて
さとみも何度も聡の友人たちに
性的奉仕をしていた。
もっと奥まで
ふぁ、ふぁい
ぢゅぶっ
ぢゅぶっ
ぢゅぶっ
ぢゅぶっ
ぢゅぶっ

かすかにとなりから、声が聞こえた。

さとみは彼氏のすぐ隣の部屋でほとんど知らない男のちんぽを加えているこの状況に強い罪悪感を覚えつつも逆に興奮してしまう。

もうだめだ
おれはがんばるぞ
はやくいってよ
ドイツ
ちゅぷっ

おれもそろそろいくぞ
全部飲んでね
ぐふっ
ちゅぷっ
ちゅぷっ
ちゅぷっ
ドプッ

結局、さとみは最後になった。

合宿中にさとみの番は回ってこなかった。

彼氏で練習

最近さとしは、あまりさとみの相手をしなくなっていた。

さとみはなんとか聡に振り向いてもらおうとあの手この手をつくしていた。

「先輩いいですか」

「ああ」

半ば強引に聡を連れ込む。

なかなか手馴れた手つきに聡は正直感心する。
マットプレイか
ペロ
ニュル
ニュル

練習したのかい？
じゅぷっ
彼氏使って練習しました
ははは
生ではさせてません
ペロッ
ペロッ
にゅるっ

聡からするとさとみのまんこは
余り締りが良くなく、
せいぜい並といったところだった。
そんな聡の思いも知らずに
一心不乱に腰を動かす。
けど肝心のまんこはゆるいな
ああっ
んあっ
ずっぷっ
ずぷ
ずぷっ
ずぷぷっ

あんっ
一生懸命で悪い子じゃないんだけどな
ふあぁぁっ
切り捨てるか
ぐぶっ
じゃぶっ
じゃぶっ
ずぶっ
ぐぶっ

なかなかイけない聡は
昨日見たAVを思い出しながら
何とかさとみの中にぶちまける。
ドピュピュッ
あぁあぁあぁあっ

種付け

卒業シーズン

追い出しコンパが行われた。

（最後どうするかな）

（先輩……）

聡はもうさとみには飽きていたので最近は抱くことはなかった。

「先輩、最後にお願いが……」

（まあ、最後くらい……）

「向こうの部屋に行こうか」

聡はさとみを連れて空き部屋に移動する。

私、今日危険日なんです
……
先輩の子供生みたいんです！
認知しなくていいからお願いします
さとみは聡に子種をねだった。

聡は正直びっくりした。
リスクも考えたが、
男として乗らない手はなかった。
ずぶぶっ
あああ
んあああ
あり……がとうございます

聡は激しく打ち付ける。
んあぁ
ばん!
ぱん!
んぐあっ
ぱん!
こんなに強く聡にしてもらうのは久しぶりだったのでさとみは歓喜に震える。

あいかわらずゆるいけど
種付けのためだと思うと……
聡は今までにないくらい激しくさとみを犯す。
んあああ
おほおおおっ
ずぶ
ばんっ
ばんっ
ばんっ
ずぶっ
ずぶっ

だすぞ
ドピュピュッ
おごおおおお
さとみは
獣のような雄たけびをあげる。

じゃあ、片付けはよろしく
そういって、聡はさとみを置いて部屋を出て行く。
さとみは聡の精子が受精するのを感じた。
ごめんね、たける君。二人目はたけるくんの子供生んであげるから……
さとみはどのようにたけるをだますか考えるのであった……